

# 都市計画・まちづくりに関わる若手世代の仕事・家庭・自分自身の時間バランスに関する研究

大阪大学大学院工学研究科 松本 邦彦  
 ワイキューブラボ 依藤 智子  
 松本拓建築事務所 松本 拓  
 オフィス檜 檜 侑子  
 水辺のまち再生プロジェクト 笹尾 和宏  
 高橋 朋子

## 1. 研究の背景と目的

都市計画・まちづくりの分野は、従来からの空間や施設整備などのハード整備だけではなく、近年は経済学、福祉、文化、歴史、デザインなどのソフト分野との連携を深めている。そして計画に関わる主体や意思決定システムも、行政による広域な計画だけではなく、特定の地域の市民や活動団体・企業の意見が計画に反映されることや、さらには計画策定や事業実施の担い手となることも一般化してきている。また都市空間のマネジメントが重視されるなかで、コミュニティの醸成やその活動を支援する仕事、多様な主体への的確な情報発信を担うデザイナー、クリエイターなども、まちづくりに関する重要な役割を担っている。このように、計画・事業の内容や方法の多様化に応じて、都市計画・まちづくりに関わる仕事も様々な業種に及んでいる。

一方で、仕事としてではなく、地域の自治活動、趣味や自己実現の活動として当該分野に関わる事例も多く存在している。専門家としては、それらの活動に参加することが、結果として仕事につながるスキル確保や人的ネットワーク形成、さらには自分自身の楽しみにつながっていることもある。またこのような個人または特定の集団の活動が、都市の魅力アップや地域コミュニティ活性化などに寄与している事例も増えてきており、これらを持続的な動きとすることは公益に繋がるものとなっている。しかし、これらの「自分自身」の活動は個人の「仕事」と「家庭」のウェイトに影響を受けるため、結婚や出産などのライフステージの変化に伴って、以前は無理なく担っていた役割を十分に担うことができなくなることも想定される。

このように都市計画・まちづくりへの関わり方が多様化していることは認識されている一方で、働き方の実態やパートナー・家族との関係、また仕事・家庭とのバランスの中で、どのように自分自身の楽しみや自己実現の時間・機会を見出しているのかは明らかになっていない。

既往研究においては、趙ら<sup>1)</sup>(2006)が住居系・建築系大学出身女性を対象に調査を実施し、ライフステージの変化に伴い転職が多いが、職種や雇用形態を変えながらもキャリアを継続している人が多いことを明らかにしている。また藤岡<sup>2)</sup>(2009)は育児期の女性の生活時間に注目している。しかしパートナー双方の視点、仕事・家庭以外の自分自身の時間という視点は無く、その現状は明らかになっていない。そこで本研究では、仕事または個人の活動など様々な形で都市計画・まちづくりに関わる若手世代の働き方や、

仕事・家庭・自分自身の時間バランスの現状を明らかにすること、またその現状に対する認識や、よいバランスを保つための工夫などを明らかにすることを目的とする。

## 2. 研究の方法

若手世代の働き方、時間バランスを明らかにするために、アンケート調査を実施した。調査は都市計画・まちづくりに関連する業務に従事している人、または趣味・自己実現のための活動で当該分野に何らかの形で関係していると自身で認識している人であり、かつ既婚者または同居するパートナーがいる人を対象とした。

調査票は電子ファイル形式で作成し、電子メールに添付して配布した。またサーバー上にファイルを設置し、希望者がダウンロードできるようにした。回収も電子メールで受け付けた。アンケート調査は2014年9月1日から11月10日にかけて実施し、建築・まちづくり分野の出版社メーリングリスト、都市計画学会誌での調査告知ほかで回答を依頼した。62件の回答(有効回答数60)を得た(表1)。

## 3. 回答者の属性

回答者のうち男性は42名、女性は16名である。平均年齢は男性が37.1歳、女性が38.4歳であり、30歳前半が最も多く、次いで30代後半が多くなっている(図1)。

子どもの有無と末子の年齢から回答者をライフステージ別に分類した(図2)。夫婦またはパートナーのみ世帯に属する人が15人(25.9%)、子どもが存在する世帯に属する人が43人(74.1%)となっている。子どもがいる世帯のうちでは、

表1 調査概要および調査票の内容

項目	内容
実施時期	2014年9月1日～11月10日
配布回収	調査票(電子ファイル)をメール添付、またサーバーから回答者がダウンロードして回答。メール添付により回収。
対象者	①都市計画・まちづくりに関連する業務に従事している人 ②趣味・自己実現のための活動で都市空間や地域コミュニティなどに何らかの形で関係していると自身で認識している人 上記①②のいずれかに該当し、かつ既婚者または同居するパートナーがいる方
回収数	62件(有効回答数60)
主な内容	・基本情報(年齢性別、業種、働き方、家族構成ほか) ・あなたとパートナーの家庭での役割分担 ・仕事、家庭生活、自分自身の時間のバランス ・時間バランスを上手にとり、生活を充実していくための工夫 ・自由記述

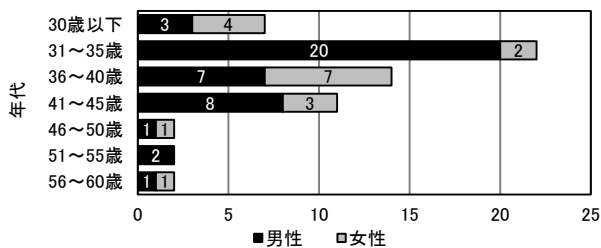


図1 年代別回答者数 (N=60)

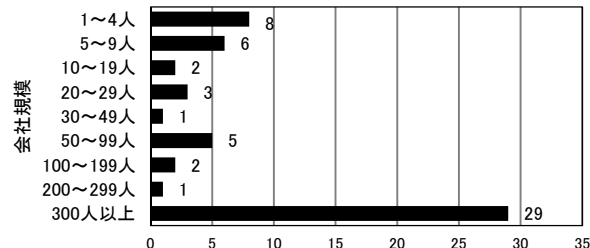


図3 会社規模 (N=57)

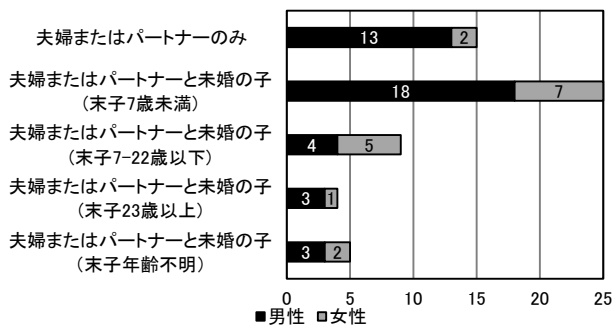


図2 ライフステージ別回答者数 (N=58)

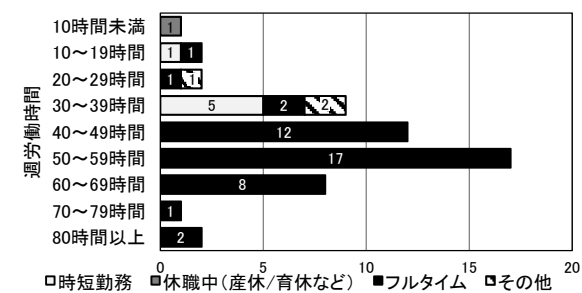


図4 労働時間(週あたり) (N=54)

表2 回答者の職業と業種 (N=58)

	パート・アルバイト等	会社員	会社役員	研究・大学職員	公務員	自営業・フリーランス	その他	計
官公庁	-	-	-	-	4	-	-	4
建設コンサルタント	1	11	2	-	-	-	1	15
住宅メーカー	-	1	-	-	-	-	-	1
設計事務所	-	2	1	-	-	1	-	4
不動産・開発	-	2	2	-	-	-	-	4
ゼネコン	-	4	-	-	-	-	-	4
その他	4	9	2	4	1	3	3	26
計	5	29	7	4	5	4	4	58

7歳未満の未就学児が存在する人が25件と最多となっている(図2)。

#### 4. 働き方

回答者の職業と業種を表2に、会社規模を図3、労働時間を図4に示す。会社員が29名(50.0%)と最多であるが、会社役員が7名、自営業・フリーランスが4名と個人または小規模組織で働いている人も比較的多くなっている。業種は建設コンサルタントが15名(25.9%)と最多であった。業種「その他」はデザイン関係や大学教員など、また仕事以外の機会でもまちづくりに関わっている人など多様となっている。会社規模は従業員300人以上が29人(50.9%)と最多であるが、次いで4人以下が8人(14.0%)、5～9人が6人(10.5%)と少数で働いている人も多くなっている。

一週間あたりの労働時間は50～59時間が17人(31.5%)と最多で、さらに60時間以上の合計は11人(20.4%)となっており、長時間労働の傾向にある。

#### 5. パートナーとの役割分担

家庭におけるパートナーとの役割分担の状況を図5,6に示す。家事および育児とも男性の8割以上はパートナーに

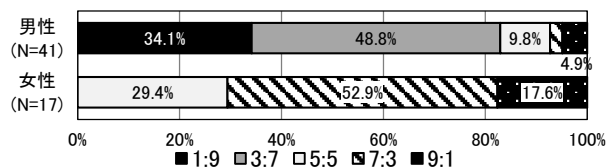


図5 家事分担(パートナーとの分担率 自分:パートナー)

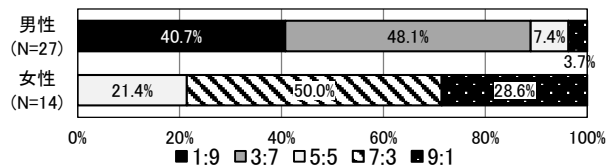


図6 育児分担(パートナーとの分担率 自分:パートナー)

大きく依存している状況にある。一方で、女性は家事が70.6%、育児が78.6%と本人に負担が集中している状況にある。

#### 6. 仕事・家庭・自分自身の時間バランス

都市計画・まちづくりに関わる若手世代が、仕事と家庭に費やす時間に対して、楽しみや自己実現につながる活動等に費やす「自分自身の時間」を確保することができているのか、またそのために仕事と家庭とのバランスをどのように取っているのかを尋ねた。質問にあたっては、活動時間を「①仕事」「②家庭生活」「③自分自身(①,②以外の趣味や友人との付き合い・交流等)」の3つに分類した場合の「自分自身」の時間の確保のしかたのイメージ図を提示し、自身の状況に最も近いパターンを選択してもらった(図7)。

男性はパターンGが22.8%と最多であり、自分自身だけの時間を確保できていないが、家庭および仕事の中で楽しみや自己実現を見出している。次いでパターンAが21.4%と多く、仕事の合間のわずかな時間のみという現状にある。

一方で女性はパターンEが27.8%と最多であり、男性同様に自分自身だけの時間を確保できていないが、仕事ではなく家庭生活の中で自身の楽しみや自己実現を見出している。また男女とも自分自身の時間を確保するために仕事の比率を下げている回答者は存在しなかった(図8)。

ライフステージ別にみると、子どもがいない回答者は家庭生活の比率を下げて自分のための時間を確保しているパターンCが11.1%存在するが、子どもがいる世帯ではその比率が低下しており、ライフステージの変化により自分自身だけの時間を確保できなくなっていることがわかる。7歳未満の子どもがいる世帯では、パターンGが32.0%と最多であり、自分自身だけの時間は確保できていないものの仕事や家庭の中で自身の楽しみや自己実現を見出している(図8)。

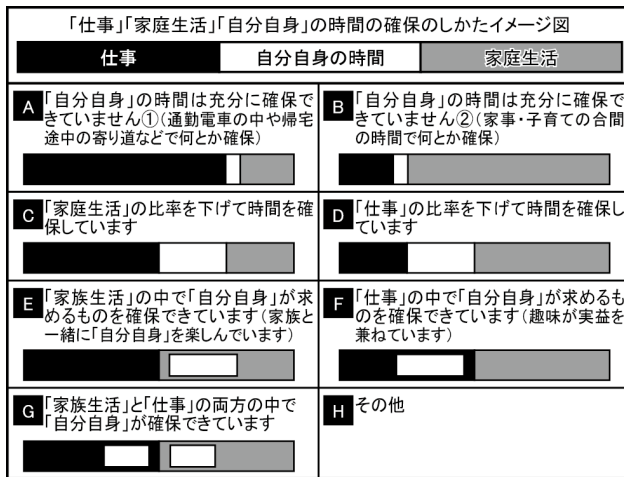


図7 仕事・家庭生活・自分自身の時間確保イメージ図

業種別で最多の建設コンサルタントは、パターンGが33.3%と最多で、自分自身だけの時間は確保できていないが、家庭と仕事の中で楽しみや自己実現を見出している。次いで、仕事の合間で確保するパターンAと家庭比率を下げて確保するパターンCがともに13.3%となった(図9)。

会社規模別にみると、個人または10人未満の規模の会社で働く人は仕事自体を楽しみや自己実現としているパターンFが28.6%と多く、規模の大きな会社に所属する人と異なる傾向にある。一方、それ以上の規模の会社に所属する人は、積極的に時間は取れないものの、仕事の合間で確保するパターンAが多くなっている。

回答者に自身の「仕事・家庭・自分自身の時間バランス」に対する満足度を尋ねた(図10)。現状の時間バランスに「満足」している回答者は全体の8.2%と少なく、何らかの不満を抱えている人が多くなっている。特にパターンAは「不

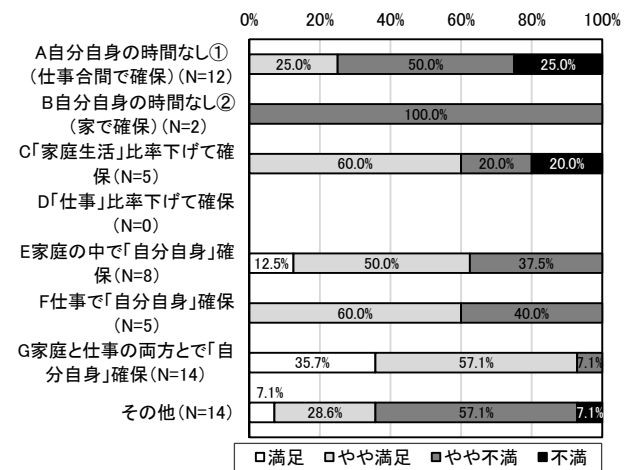


図10 「仕事・家庭・自分自身の時間バランス」満足度

	性別		ライフステージ別(一部)		
	女性(N=18)	男性(N=42)	夫婦・パートナーのみ(N=15)	パートナーと未婚の子(末子7歳未満)(N=25)	パートナーと未婚の子(末子7-22歳以下)(N=7)
A 自分時間なし①(仕事合間で確保)	16.7%	21.4%	26.7%	12.0%	22.2%
B 自分時間なし②(家で確保)	11.1%	0.0%	0.0%	8.0%	0.0%
C 「家庭生活」比率下げて確保	5.6%	9.5%	13.3%	4.0%	0.0%
D 「仕事」比率下げて確保	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
E 家庭の中で「自分自身」確保	27.8%	7.1%	20%	8.0%	22.2%
F 仕事で「自分自身」確保	5.6%	9.5%	0.0%	8.0%	11.1%
G 家庭と仕事両方で「自分自身」確保	11.1%	28.6%	20.0%	32.0%	11.1%
H その他	22.2%	23.8%	20.0%	28.0%	33.3%

図8 「自分自身の時間」の有無と時間確保の方法(性別、ライフステージ別)

	業種別(一部)					会社規模別		
	ゼネコン(N=4)	官公庁(N=4)	建設コンサルタント(N=15)	設計事務所(N=4)	不動産・開発(N=4)	1~9人(N=14)	10~99人(N=11)	100人以上(N=32)
A 自分時間なし①(仕事合間で確保)	75.0%	50.0%	13.3%	25.0%	0.0%	7.1%	18.2%	28.1%
B 自分時間なし②(家で確保)	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	14.3%	0.0%	0.0%
C 「家庭生活」比率下げて確保	0.0%	0.0%	13.3%	0.0%	0.0%	7.1%	9.1%	9.4%
D 「仕事」比率下げて確保	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
E 家庭の中で「自分自身」確保	25.0%	0.0%	6.7%	0.0%	50.0%	7.1%	27.3%	12.5%
F 仕事で「自分自身」確保	0.0%	0.0%	6.7%	25.0%	25.0%	28.6%	0.0%	3.1%
G 家庭と仕事両方で「自分自身」確保	0.0%	25.0%	33.3%	50.0%	0.0%	28.6%	27.3%	21.9%
H その他	0.0%	25.0%	26.7%	0.0%	25.0%	7.1%	18.2%	25.0%

図9 「自分自身の時間」の有無と時間確保の方法(業種別、会社規模別)

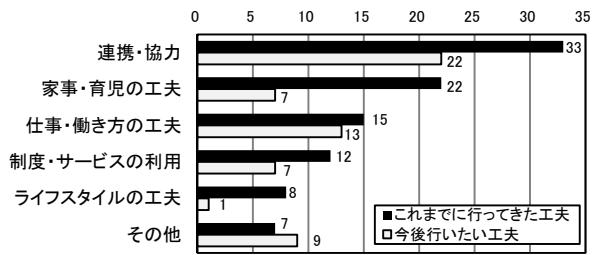


図 11 負担軽減のための工夫

(複数回答, これまで: N=46, 今後: N=32, 自由記述回答を筆者が分類)

満」が 25.0%、「やや不満」を含めると 75.0%となっており、まとまった自分自身の時間を確保できていないことを不満に感じている。一方で、パターン G は「満足」が 35.7%、「やや満足」を含めると 92.8%となっており、特に自分自身だけの時間は確保できていないものの、家庭および仕事の中に自身の楽しみや自己実現を見出し高い満足を得ている。

## 7. 負担軽減・質向上のための工夫

これまでに行ってきた「負担軽減のための工夫」「生活の質の向上や、より充実した(楽しい)生活のための工夫」、また今後行いたい工夫を自由記述形式で尋ねた。

### (1) 負担軽減のための工夫

得られた回答の内容から、筆者が6つに分類した(図11)。負担軽減の工夫では、これまでに行ってきた工夫、今後考えられる工夫共に、パートナーや両親などとの「連携・協力」が 33 人と最も多く、パートナーとの連携や自分もしくはパートナーの親との近距離居住を行い、育児期に協力を得るといった回答が多く見られた。

これまでに行ってきた工夫では、「家事・育児の工夫」が 22 人と次に多く、外食や中食、生活用品・食材の戸配サービスの利用等による家事の効率化が行われている事が分かった。今後考えられる工夫では、「仕事・働き方の工夫」が次に多く、勤務時間の短縮等の働き方の変更や、仕事の選択等が考えられている事が分かった。

### (2) 生活の質向上のための工夫

得られた回答を、筆者が「時間の過ごし方(3分類)」「生活の質向上のための工夫(8分類)」に整理した(図12)。

時間の過ごし方に関する工夫として、これまでに行ってきた工夫は「家族一緒に楽しむ」が 32 人と最も多かった。具体的には「夫婦・パートナーで趣味を共有する」が 9 人、「夫婦・パートナーとの交友関係を共有する」が 5 人であった。次いで「自分の時間や空間を確保」が 10 人と一定数存在し、具体的には「パートナー・夫婦間の工夫でひとりの時間を作る(子どもがいる世帯)」が 8 人であった。

一方、今後の工夫としては上記ほか「同居家族以外の人との交流」が 7 人存在した。家族と過ごす時間は生活の質向上のために必要であるが、一方で自分だけの時間や、家族以外の人との交流も個人の充足感には重要であるといえる。

また「生活の質向上のための工夫」としては、「趣味や外出」が 27 人、「仕事の工夫」が 12 人、「時間の区切り・優先順位

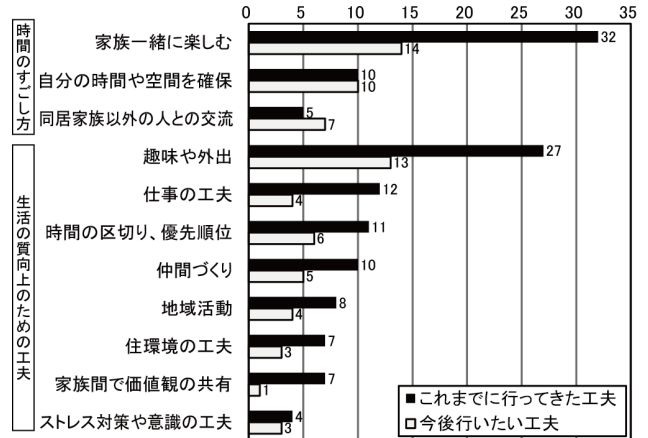


図 12 生活の質向上・より充実した(楽しい)生活のための工夫

(複数回答, これまで: N=50, 今後: N=34, 自由記述回答を筆者が分類)

が 11 人となっており、自分自身の時間・楽しみをしっかりとること、仕事の効率化などによる工夫が中心となることが分かった。

## 8. まとめ

都市計画・まちづくりに関わる若手世代は、自分だけの特別な時間を十分に割くことはできておらず、また特に若手という立場から、仕事の比率を下げるという選択も難しい状況にある。一方で、家庭生活や仕事そのものの中に自身の楽しみ等を見出している状況が多い。企業を巻き込んだ働き方や労働時間の見直し、各種制度などのサポートは必要ではあるが、業界の働き方を鑑みると、自分だけの時間を増やすことは難しく、既存の活動の中にいかに「自分のため」と思える時間を増やせるかが重要となってくる。場合によっては、起業などにより、「自分のため」と感じられる仕事を増やすなど、働き方そのものを変えるということも選択肢の一つとして考えられる。

一方で、積極的に自分だけの時間を割くことができていない現状は、業務以外での地域との関わり、ひいては都市空間の魅力形成やコミュニティ活性化に寄与する潜在的な機会を損失しており、その確保は今後の検討課題となる。

### 【謝辞】

本研究は公益社団法人日本都市計画学会関西支部の2013年度および2014年度「都市計画研究会 研究助成」を受けた『「まち」に関わる若手が地域とつながる家庭のあり方を考える研究会』の研究成果の一部をまとめたものである。ここに記して謝意を表します。

### 【参考文献】

- 1) 趙ら(2006)「建築・住居系学科女子卒業生の仕事と生活歴」日本建築学会、学術講演梗概集(F-1),pp1095-1096
- 2) 趙ら(2007)「住居系・建築系学科女子卒業生の仕事と生活をめぐるライフヒストリーに関する研究」日本建築学会、近畿支部研究報告集 計画系(47),pp713-716
- 3) 藤岡(2009)「女性視点からみた育児初期の生活時間変化」日本建築学会、学術講演梗概集(F-1),pp1253-1254